

日本語の論理性

蓮沼啓介(神戸大学)
hasunumak@qit.ne.jp

【要約】

日本語はあまり論理的ではないという見方が根強い。一方、日本語は論理的であるという逆の見方も強い。しかもこうした正反対の見方が交わることなく併存しているが、その理由は思うに明白である。論理には二種類あり、どちらの論理に照らすかによって、日本語は論理性の低い言語とも見なされるし、また論理性の高い言語ともみなされる。今回の報告では二種類の論理を対照してその関連を論じる。

1. 問題の所在

日本語では関係代名詞が発達していないが、それはなぜか。

池上 1981 はこの問いに明快な答えを出している。英語と日本語の運動動詞を対照すると英語では個体への注目が優位し、日本語では全体的な状況への注目が優位することがわかる。関係代名詞は先行詞を個体として認識しそれを取り出す語法であるから、英語には適しているものの、日本語には適していない。

日本語ではコトがモノに優位し、状況が個体を包み込むからである。

モノとコトは物事を認識する様式の差異であるから、同じ物事が時にモノとして捉えられ、時にコトとして捉えられることもある。それはコトがモノを蔵しているからである。池上 1981 によれば、日本語ではモノはコトの内部に融解してしまうのである。

寺村 1981 はやや異なった見方を提出している。寺村は言う。「モノが個別的であるのに対してコトは一般的」であるし、「モノが感覚(五官)ないしそれに準ずる心理作用によって把握される対象であるのに対して、コトは思考によって把握される対象、発話や知識の内容である」(寺村 1992、85 頁)。又こうも言う。「思考や知識の対象はコトだが、感覚の対象はコトではない」(同 91 頁)。モノが具体的な対象であるのに対して、コトは抽象的な対象を表すという違いを示しながら、一見同じ内容をモノと見たりコトと見たりする実例を挙げている。更に全体的な状況を示すコトのうちに、モノがその一部として含まれながら独自の本性を発揮する事例を示している。池上 1981 ではモノはコトの内部に埋没しているのに対して、寺村 1981 では、全体的な状況を示すコトのうちに一部として含まれながら、全体的な状況の変化を通して、不変かつ恒常の本性を保つ部分がモノであることが示されている。

こうしたモノの特性をあらわに示す語形が連体修飾節の内の関係である。内の関係では、底の名詞が連体修飾節の内部から取り出されて主節の一部に移動する。連体修飾節の表す事態のうちにその一部として含まれていた名詞が、そこから取り出されて底の名詞とされる。英語における関係代名詞は個体としての先行詞に付着しそれを反復する。これとは対照的に、日本語の連体修飾節では取り出された名詞はそのまま主節の一部へと移動して底の名詞となり、主節と連体節の双方にあくまでもその一部としていわば虚実ないし裏表の形で二重に所属し、状況の全体を組み立てるかなめとなる。

英語が個体に注目する言語であるのに対して、日本語は全体的な状況に注目する言語である。関係節と連体節の示す構文的な差異はこうした特質にほぼ対応しているわけである。

2. 二種類の論理

ところでどうして英語では個体への注目が優位するのであろうか。その理由はこう考えられる。まず英語には主語と述語の一致という文法指標がある。無数と有数を区別し、単数と複数を使い分ける数の一致はその一部である。こうした文法指標により個体の認識が絶えず促される。また個別 particular と普遍 universal を区別し、その関連を明白に示す思考の伝統がある。更に古代ギリシャにおける普遍の発見に遡る形式論理の普及がある。個別をすべて数え上げて普遍に至る伝統がこうして形成され、今日に至っている。個体への注目はこうした伝統の一環である。

論理は $\lambda o \gamma o \sigma$ の訳語であるが、 $\lambda o \gamma o \sigma$ には言葉と論理という二つの意味がある。この区別に応じて論理は形式論理 formal logic と日常論理 natural logic との二つに分かれる。形式論理は数学の論理である。それは正式の論理であるし、いわば晴れ着の論理である。一方、日常の論理は言葉の論理である。それは略式の論理であり、普段着の論理である。語学や文法の論理と呼ぶこともできよう。

数学の論理は記号を用いて示す記号論理である。フレーゲが形式化し、ラッセルとホワイトヘッドが一般化した論理規則の体系である。一方、日常の論理はこれまで知られていない。今回の報告で初めて紹介される知られざる論理である。日本語におけるコトとモノの区別を材料に自覚される論理である。

数学の論理と日常の論理を簡単な表の形で対照的に示そう。

I 式 (普遍式)

すべての猫は例外なくけものである。

うちに猫がいる。

∴ うちの猫もけものである。

II 式 (普通式)

すべての猫は例外を除けばけものである。

うちに猫がいる。

うちの猫はぬいぐるみではない。

うちの猫は招き猫ではない。

などなど。

うちの猫は例外には当たらない。

∴ うちの猫もけものである。

I 式は形式論理を示す。II 式は日常の論理を示す。I 式はII 式の特別な事例である。II 式において例外を ϕ つまりゼロとすると I 式が導かれる。形式論理は日常の論理の特殊事例である。

3. 個別 particular と普遍 universal

個別と普遍の区別と関連を説明する。

(1) 猫がいる。

(2) すべての猫は猫である。

例文の(1)は一匹一匹の猫を示す。言い換えれば個物としての猫を示す。一匹一匹の猫を個別的に示す

文である。これに対して(2)は猫のコンセプトを示す文である。うち「すべての猫」は個別の猫を一匹二匹三匹とすべて数え上げるのに対して、「猫である」は猫のコンセプトを示す語句である。言い換えれば猫の普遍を示す。一匹一匹の猫は個別にネコという名で呼ばれるが、ネコという名で呼ばれるどの個物にも猫の本性である eidos が備わっている。例外なくすべての猫は eidos という猫の本性を有している。Eidos という猫の本性を有するすべての猫を余すことなくすべて数え上げてひとつに集め、思考の対象とする。これが猫のコンセプトである。猫の理會であり、猫の概念であり、猫の普遍である。例文の(2)はトートロジーつまり恒真式である。恒に正しい永遠の真実である。中身の無い空っぽの真実である。

猫という種族 eidos が実在する。数限りない猫たちの巨大集団である猫という種族が実在し、猫というコンセプトを下から支えている。従って猫というコンセプトは単なる思いつきから産まれたものではない。

(3) 机がある。

(4) すべての机は机である。

猫とは違って机には eidos はない。机は人が作るものであり、人の定める用途とその使い方があるだけである。

以上、猫と机を材料に用いて個別と普遍の区別と関連を説明した。こうした個別と普遍を明白に区別する思考の伝統は古代ギリシャにまで遡る。 $\forall x$ や $\exists x$ といった論理記号は個別と普遍の区別を形式化した符号である。

4. 普遍の発見

すべてという言葉の意味を発見し、普遍を自覚したのは古代ギリシャにおいてである。アリストテレスは後世オルガノンと呼ばれた論理三部作である活語論と表示論と分析論を残したが、活語論では活らき言葉であるカテゴリーの種分けが試みられている。

「これはかくかくしかじかである」という判断では「これは」という題目を掲げて「かくかくしかじかである」という述定が行われている。普通述語とか Predicate とかいう述定に用いる言葉がカテゴリーである。活語つまり活らき言葉と呼んで置く。アリストテレスは次の問いかけの答えに応じて活語を分類している。

- | | |
|------------------|--------|
| (5a) それは何であるか。 | (実体) |
| b それはどのくらいあるか。 | (分量) |
| c それはどの様であるか。 | (性質) |
| d それは何に対してあるか。 | (関係) |
| e それはどこにあるか。 | (場所) |
| f それはいつあるか。 | (時間) |
| g それはどんな姿をしているか。 | (姿勢) |
| h それは何をなすか。 | (能動) |
| i それは何をなされるか。 | (受動) |
| j それの反対は何か。 | (対立) |
| k それは先か後か。 | (優先) |
| l それは並んでいるか。 | (同時) |

m それはどう動くか。 (運動)

n それは何を持つか。 (所持)

このうち(5a)の問いにおける「それ」を第一の実体と呼んでいる。次の(6)における「これ」もまた第一の実体である。第一の実体は単独の実体である個別の馬のことである。

(6) これは馬である。

(7) 馬はけものである。

これに対して(6)における「馬である」や(7)における「馬」は個物ではなくて馬という種族のことである。こうしたすべての個物の全体を第二の実体と呼ぶ。第二の実体は第一の実体に対しては活語に位置するが、(7)では題目の位置に立つ。

第一の実体は個別を指し示す。第二の実体は種族すなわち *eidōs* を指し示す。第一の実体である一匹一匹の馬には馬という種族の有する *eidōs* 本性が備わっている。こうした種族の本性である *eidōs* を備えたすべての馬を集めたものが第二の実体である、

活語の分類を通してアリストテレスはすべてという言葉の意味を明確に自覚し、種族はすべての個別から構成されていることを明らかにした。一匹一匹の馬を数え上げていけばやがてすべてを数え尽くすに至る。これがすべてということである。普遍とはすべての個別を数え上げたもののことである。

普遍は三段論法という論理の定式に定着し、後世に長く広まることとなった。

5. 普遍と普通

英語では個体への注目が優位しているのに対して、日本語では全体的な状況への注目が優位している。とはいえ、コトという全体的な状況にその一部として含まれながら、全体的な状況の変化にもかかわらず不変恒常の形を保って自立する部分であるモノに対する注目もまた日本語の特質である。この点で、モノはコトの内部に融解してしまうという池上 1981 の見方は一面的である。コトという全体的な状況に注目しながら、その部分として自立する本性を備えたモノにも注目する日本語では、個別と普遍の区別と関連が英語を始めとする西洋語とは異なった形をとる。

古代ギリシャでは無数と有数、単数と複数という文法指標により、分離物と連続体が区別され、更に単独の実体である単体と複数の単体の集まる集合体が区別された。人も馬も牛も単体であるし、集合体でもある。集合体は単体の集まりであり、ひとつひとつ数えていけば全体に行き着く。こうして $\epsilon\iota\delta\omicron\sigma$ という種族の本性をもつものがまず単体とその集まりである種族に区分され、すべてという観念が抽出される。普遍の発見である。

日本ではモノは状況の一部であり、分離物としては不徹底である。こうして単体としての分離度程度が発生する。単体の集まりである集合体についても、すべてを数え上げることは必ずしもできないこととなる。例外が発生するからである。モノといっても単体であるか単体とは言えないかという個性を示す分離度に度合いが発生し、例外的な事態の発生が避けられないからである。

こうして三段論法の定式にも I 式と II 式が発生する。I 式は数学の論理を示し、II 式は言葉の論理を示す。数も言葉も分離物であるが、数と言葉には分離度に異なりがある。数が完全な分離物であるのとは異なって、言葉は分離物であるもののその分離度ははるかに低い。単語であるかどうか判然としないこともよくあることであるし、一語か二語かはっきりしないことも珍しくない(追記参照)。

無数と有数を区別し、単数と複数を区別する西洋語の世界で数学の論理が発見され発展するのとは対照的に、無数と有数を区別しない日本語の世界では、論理の発見と普及は遅い。やがて西洋から渡

来した数学の論理との違いを通して、言葉の論理が自覚されるに至る。普通とはほぼすべてということである。

普通の論理に照らせば日本語は論理的な言語である。また普通の論理に照らせば日本語は論理性に乏しい未発達の言語ということになる。

6. 判断形式の二種類

次の(8)は論理形式を示す。(9)は普通形式を示す。

(8) x は f である。(シーザーはガリアを征服した)

(9) N は F である。(猫はけものだ)

論理形式は固有名を代入する変項 x と変項 x を含む命題関数からなる。固有名 a が命題関数を満たす値であれば $f a$ は真となる。普通形式はものの名を示すことばを N とし、はたらきの名を示すはたらきことばを F とすれば、 N と F をつなぎことばでつないだものである。(9)では猫がなことばであり、けものがはたらきことばであり、はがつなぎことばである。本体を表す言葉である体言が N にあたり作用を表す用言が F に当たる。 N は主辞 Subject と呼ぶことができるし、 F は属辞 Predicate と呼ぶことができる。これまでの伝統的な名辞論理 Term logic はその定式化である。 F ではなく F と P の中間となる記号である矢印の付いた F を使いたい所である。Function と Predicate の双方の意味に用いたい記号であるからである。

例文をあげて置こう。

(10) 鳥が飛んでいる。

(11) 雪が降る。

(10)では N = 鳥であり、 F = 飛んでいる、である。はがつなぎことばである。 N = 鳥は一羽の鳥を指し示すこともあるし、数羽の鳥を指し示すこともある。どちらも目の前の現象を指示対象とする。(11)のように個体とはいえない現象を N と F とに分かってそれをつなぐ判断文も形成される。普通形式の判断文では個体でも集合体でも連続体でも N によって指し示される。霧が立ちこめる。靄が立つ。風が吹く。 N は F という普通形式の判断文は、目の前の現象を指し示す時には N は F という文全体で目の前の状況の全体を指示対象とする。また一般的には N はほぼ F であるという事態を指示対象とすることになる。その背景には普通の論理が使われていることが分かる。

(追記) ことばと数について

数とは数えるという操作を指し示す記号である。数という記号を示す数字という音声や文字の記号がある。記号とは自身とは違うなにかを示すものである。数が完全な分離物であるのは、数そのものもまた記号であるからである。事物の数を数えるには分離した記号が必要であり有用である。記号は人が用いるものであり、必要に応じて分離物に作り上げることができるからである。

フレーゲは数は実在するという信念を抱いていた。記号を実在と取り違えていたということである。フレーゲによる意義と意味の区別は明晰であるが、対象の中心が数という記号であったからである。形式論理が厳密なものと同じ理由による。

ことばは対象指示や行為指示や記号指示に用いられる記号である。指示される対象には実在する事物のほか、想像された事態の絵や図や模型やイメージも含まれる。ペガサスや一角獣も神話やおとぎ

話ではおなじみのキャラクターである。

行為指示の用法は主に言語ゲームや遂行発言として分析が重ねられている。ことばの指示する対象は千差万別であり、その変化は連続的である。ことばには霞みやもやが発生することは避けがたい。ことばの分離度には度合いが発生し、単語としての一体性が時に弱まることも起こるからである。

ことばという音声記号が話し手や聞き手の心の中に生み出すイメージとフレーゲのいう意義 Sinn との関連がこれまで不問に付されてきた。猫という言葉を知るとまず猫のイメージが浮かんで来る。このイメージを記号として用いる操作が意義という言葉の意義である。話し手や聞き手の心の中に浮かぶ猫のイメージは話し手や聞き手の心の外にある実物の猫を指示する記号である。個物としてのネコの姿とその所属する種族としての猫の形を指示する記号である。こうした猫の姿や形を手がかりにして猫のコンセプトが必要に応じて呼び起こされ、あるいは形成されて思考の内容ないし対象とされる。心の中のイメージはいわば猫のコンセプトを呼び出す名札ないしインデックスである。フレーゲはこのイメージの作用を見落とし、思考の内容を思考作用から分離し独立したものと捉えた。数は実在するという信念を捨てた後のフレーゲには、思考された内実は実在と同等の存在であると見なすほかに残された道はなかったからである。

参考文献

池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店

寺村秀夫 (1981) 「『モノ』と『コト』」(『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版 1992)